

治水・治山をめぐる歴史文化

—— 名所図会と地域環境史研究 ——

はじめに

二〇〇五年は薩摩藩による宝暦治水工事が竣工してから二五〇年にあたる記念の年である。また庄内川流域、瀬戸などを含む尾張北東部の丘陵地帯で、ドイツ人技師アメリカ・ホフマンによって「禿山」に砂防工事が本格的に着手されて一〇〇年にあたる。昨年からは治水・治山、あるいは環境再生に関するさまざまな記念行事やシンポジウムが積極的に展開され、他方でこうした治水・治山に関する遺跡の保存に関しても活発な活動が見られる。

こうした地域社会での動きは、とくに現在の世界的な災害の頻発や異常気象の現出、あるいは眼前に近づいた大地震への対処といった事態を背景に、あらためて災害と社会的対応のあり方、防災の歴史を振り返ろうという切実な問題意識も含んでいると思われる。

自然・環境と人間との関係性を新たな視点から再検討するために、歴史地理学の立場から溝口常俊は、「地域環境史」という概念を提唱している。溝口は山や川、平野、海、島などさまざまな自然環

治水・治山をめぐる歴史文化(羽賀)

羽賀 祥 二

境のもとで、住民がそこを基盤として、あるいは他地域との交流や葛藤を通じて、生業を営み、精神生活を作り上げながら、地域の歴史を形づくってきた過程を明らかにし、それを旧来の（とくに自治体史の）叙述スタイルや構成を刷新しながら、平易に語ることが必要だと主張し、自然環境と人間生活史、環境と地域社会、自然と人間との対立と調和といった問題群を、総合的に再構成するために「地域環境史」という方法を提案している。その概念はいまだ荒削りな形でしか提起されていないが、私も「地域環境史」という概念はきわめて重要であると考えている。

溝口も指摘するように、旧来の自治体史においては、歴史学・地理学・民俗学など専門分野別に編成され、その専門性のなかで、いわば閉鎖的に、そして非常に画一化された構成と叙述がおこなわれてきたことは確かである。それは一面では各専門学問分野での研究の進展を背景にして、その専門的な成果を自治体史に反映していくという選択であった。しかし市町村のどのレベルの自治体の歴史を構想するにせよ、できるだけ専門分野別の構成と難解な叙述は避け

るような工夫が必要であるし、また近代の行政区画である市町村の枠組みに規制されて、自己完結的に編纂されてはならないだろう。

どの時代であれ、周辺地域との社会的交流・連関のなかでしか、地域住民の生活・生業は存在しえないし、現実の自治体の枠を超えて実際の生活と生産はおこなわれてきたのである。

とりわけ治水や治山という問題を考えようとするとき、河川下流域の治水問題は上流域の山の管理の問題に直接的な関係性をもっている。当然のことであるが、行政区画をこえた「流域史」や「広域史」を想定して、研究されなければならない。たしかに歴史災害や、治水・治山の研究方法としては、災害に関する伝承・信仰や情報などを取り扱う災害文化史や、災害や防災に対する社会の対処の体制や考え方を検討する災害社会史がある。しかし、治水・治山問題でいえば、上流から下流をふくむ河川流域全体が対象となり、そこでの自然環境全体や流域内部での利害の対抗性などが議論されなくてはならない。また山林の荒廃は土砂流出や滋養の不足という問題を生じ、その結果海洋の環境にも多大の影響を与えるのである(この点については愛知県の山林技師であった丹羽嘉の治山論のなかで触れる)。

「地域環境史」は直接には経済的、社会的、生活圏的に関係が薄い、距離的に離れた地域であっても、「環境」という点で分かちがたく結びついていることを歴史研究のなかで再認識させる上で、有益な枠組みであるように思われる。すでに別の所で論じたが、「地

域環境史」の観点から見て、興味深い事実がある。愛知県瀬戸地域では十九世紀に入ると、陶磁器業の発展にともなって、周辺の山々は「はげ山」状態となり、それを復旧するために砂防工事が着手されていった。砂防工事には「はげ山」の山腹に施される「連束藁工」(藁に海藻を包み地面に埋め込んで、そこに苗木を植える工法)があるが、それに使用する藁の価格が高騰したため、その代用物資として名古屋市内で排出される塵芥の利用を試み、効果を発揮したというものである。一九一二年度からはこの試みは本格的となり、名古屋市中区・東区の塵芥を大曽根から瀬戸電鉄の車両に乗せて瀬戸町に運搬し、利用に供していた²⁾。明治後期から都市化にともなって増大する塵芥処理は名古屋でも大きな問題となっていた。この塵芥を砂防工事の植林に再利用し、それは工費の縮小になることも期待されたのである。治山問題は近代都市の塵芥処理・衛生問題とつながる要素を持っていたのである。

私は「地域環境史」研究を、具体的には木曾三川流域・庄内川流域での治水・治山問題と、一八九一年の濃尾震災を素材にして進めていきたいと考えている³⁾が、本稿では治水・治山に関わる地域環境の歴史の様相や、領民と河川・山との関係性、そして治水・治山思想を検討できる資料として地誌・名所図会を取りあげてみたい。近世後期に全国で数多くの地誌・名所図会は刊行されるが、災害や防災の情報も叙述や挿し絵から少なからず読み取ることができる。しかし、そうした地誌・名所図会のなかでも、とくに『尾張名所図

『会』は尾張・美濃の地形的・地質的特徴、治水・治山に対する領主や地域社会による長年の取り組みもあるため、他の名所図会と比較して災害に関する独特の記述が見られる。この興味深い名所図会を材料として、木曾三川・庄内川流域の治水と治山という自然との闘い、自然と環境変容、環境の再生という問題を歴史的に振り返って考察したい。

一 川の生業と文化

(1) 川の恵み

河川はいろいろな様相を示す。『尾張名所図会』ではどのように河川は描かれているのだろうか。いうまでもなく川は自然の恵みを地域住民にもたらす。名所図会にはそれぞれの土地の特産品が紹介されるが、海や川の漁業もまた注目された。

(ア) すべて魚鱚^{ぎよへ}貝鱗の類多く産するゆゑ、当村に魚人数百家ありて、常にこれを捕り産業とす、殊に鰻^{うなぎ}・蛤及び青海苔を名産として、府下はもとより諸国へも日ごとに夥しく運送す、中にもうなぎを京師に送る事、その数挙げてかぞへがたし⁵。

(イ) この川魚鱚多きが中に、鯉・鮒をはじめ白魚・大蜆・鱧^{うなぎ}など殊に多くして、年中魚獵たゆる事なし、元来当国に産す

治水・治山をめぐる歴史文化(羽賀)

る白魚は、他邦に勝れて形大きく美味なり(中略)川下善太大海用といへる所に、八つ杓とて大なる杓を八つならべて、この川水を鍋蓋新田へ落とすたよりとせり⁶。

(ア) は海東郡の蟹江川、(イ) は海東・海西両郡の境を流れる善太川についての叙述である。蟹江川は交通と交易の要衝である海東郡蟹江村を流れる。海産物などを移出する商業地で、とくに京都に鰻を数多く送り出していることは注目される。また、善太川については名産の白魚などの記事である。しかもここでは新田開発と河川利用について、鍋蓋新田への用水として善太川に八カ所の堰樋が設置され、利用されていることに言及していることは、伊勢湾岸地域での新田開発の成功を示唆するものだろう。

木曾川の名産・年魚(あゆ)については、夏から秋にかけての河川流域の景観として記述がなされている⁷。

初夏の頃の若年魚は犬山辺にてとる、八、九月より魚ことごとく川下へさがるを、伊木山の下早瀬、また草井村・鹿子島村辺の瀬毎に、張切網またそぢあみといふを張りてとる、その網にかかる事夥しく、茅花^{つばな}の芝生に咲たるがごとく見ゆ、漁人・農人幾百人といふ事を知らず、川水を細き竹竿もてたたきて追ひ下すさま、めずらしく見事なり

伊木山は木曾川を挟んで犬山城の西北にある山で、このあたりで

木曾川の川幅が広がって、また川も浅瀬となって流れも速い「十八瀬」と呼ばれていた場所があった。ここからすこし川下に行くと、中州がすこしずつ増えはじめる。そして木曾川の川幅はいっそう広くなって、多くの中州が現れる。その中州が多くなる地点からすこし川上、川の南岸に草井村・鹿子島村がある。

「張切網」は『日本国語大辞典』によれば、川に横断して棒や網を両側から張って、その真ん中にうけ笠(細い竹を編んで籠状にした漁具)または布袋を付けて蟹や鰻などを捕る漁法である。また「そぢあみ」も川止めするように渡した網である。こうした網に若鮎がかかる様子は、あたかも抜き身の刀や槍に例えられる茅の白い花穂(茅ばな花)が咲くがごとく、身を翻しているようである。

(2) 祭礼と遊覧の場

川はまた祭礼が行われる場であった。海東郡津島村、佐屋川沿いに古い由緒を誇り、尾張の代表的な神社である津島牛頭天王社(祭神素戔鳴尊)があった。痘瘡除けの霊験があるとして多くの参詣人を集めていた。『尾張名所図会』は二枚の津島天王祭の挿し絵を載せている。六月十四日の「津島試楽」と翌日の「朝祭」の華やかな山車船の場面を描いたものである。十四日祭礼では船上に山車を出すものであったが、これは他国にはない「天下第一の壮観」であった。この挿し絵には山車船(巻藁船)五艘が描かれ、また五条川に山車船を浮かべておこなわれる清洲の祭礼図からも、当時の川の文



庄内川の花見 水に傍ふ総山の桜／春深くして花まさに明らかなり／長橋三万尺／恰も白雲の撃を被ふがごとし
阿部松園 橋上に争ひて見る堤上の桜／一川春色、是れ多情／花陰に曲有り人聆否す／自ら奏す琵琶、流水の
声を 画屏道人 市人もかへさばおなじ桜がりつつみせげなる花のころかな 仲敏 打わたすつつみのさく
ら咲く頃は雲より雲にかかる長橋 茂岳 植あなべし花のさかりはしら雲の中ゆく川の水とこそ見れ 道直

図1 「庄内川の花見」(『日本名所風俗図会』6より)

化の一端を知ることができる。

川は遊覧の場としても存在する。『尾張名所図会』には、「庄内川の花見」、「筏川の南涯桃林春興の図」という二枚の挿し絵がある。

「筏川の南涯桃林春興の図」は筏流しがおこなわれている川の岸辺で、十数人の遊客が桃の林のもとに集い、宴を張っている様子を描写している。

図1は「庄内川の花見」に関する挿し絵である。向こう側に見えるのは名古屋城であり、庄内川北岸の堤防沿いに花見をして歩く人々、川舟で遊覧する人々、枇杷島橋を渡る人々、中島で宴を張る姿を描いている。桜が堤防上に植えられるのは、桜の根が堤防の地盤を強化するためであるという。向こう岸の堤防上に見られる木々も桜だと考えてよいだろう。

下小田井村と枇杷島村の堤上及び枇杷島橋の中島等に、弘化二年の春数千株の桜樹を植ゑてより、いつも弥生の頃は、若木の花盛りをあらそふ、もとより品類も多ければ、七日をかぎる花の盛りも、遅きあり早きありて、彼岸桜・いと桜のふくめる頃より、山桜・八重桜の青葉さすまで、月を越えての詠めありて、雅俗の遊人つどひ来り、その賑合言語の及ぶ所に非ず、されば花を賞する詩歌も多し

堤に数千株の桜が植えられ、花見に多くの人々が集い、にぎわう

治水・治山をめぐる歴史文化(羽賀)

遊覧の場であった。しかし元禄年間には桜は植えられていなかった。元禄四年三月三日に芭蕉門人たちの「曲水の宴」はあったが、荷兮『曠野後集』には桜の句はない。しかし尾張藩は弘化二年(一八四五)桜の植樹を命じたことで、挿し絵に見るような景観が生まれたのである。弘化元年八月には庄内川が春日井郡和爾良村で決壊し、被害を出した¹⁰。この洪水が庄内川堤防に桜を植えるきっかけとなったのかもしれない。

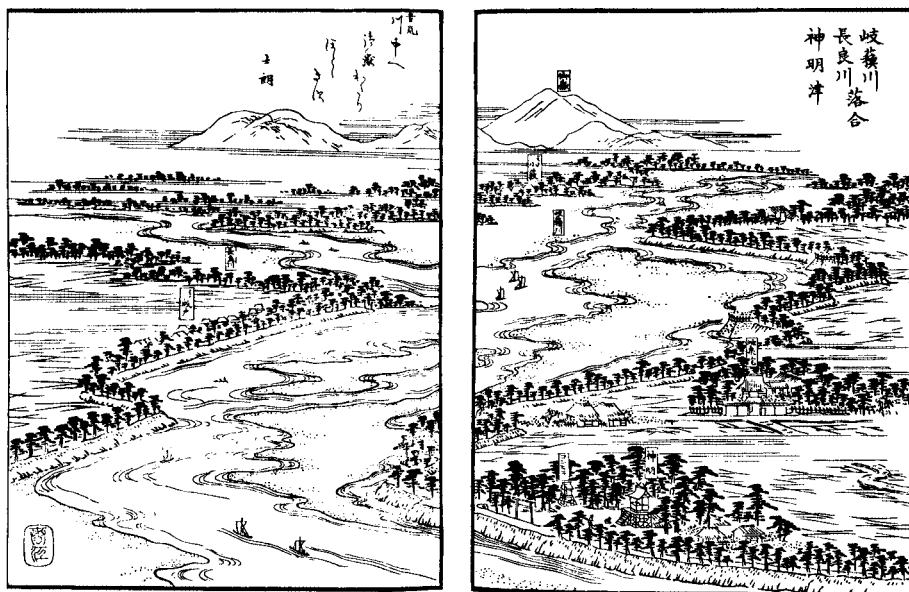
このように尾張国内の大小河川の景観について、生業の風景・川の祭礼・堤縁での花見など、さまざまな様相を『尾張名所図会』は紹介していた¹¹。しかし、『尾張名所図会』のなかに描き出された河川の様相はこれだけではない。そこには尾張における治水の歴史を考える上で、きわめて重要な事項が含まれている。尾張藩の治水工事への積極的な政策を『尾張名所図会』はシンボリックな形で紹介している。治水工法の「猿尾」と洪水被害を防ぐために実施された新川開鑿事業の二つである。

二 水を治める(Ⅰ)——草井の猿尾

(1) 河川の流れと輪中堤

図2は『尾張名所図会』に掲載されている木曾川と長良川が合流する地点を西南から見た鳥瞰図である¹²。

はるか遠くに御嶽山が見え、そこを源流とする木曾川が図の右奥



岐蘇川、長良川落合 神明津 『青風』川中へ御嶽出でたりほととぎす 土朗

図2 「岐蘇川長良川落合・神明津」(『日本名所風俗図会』6より)

の方から、そして左奥から長良川がちょうど図の中央で合流し、広い川幅となって、蛇行しながら下っている様子がうかがえる。合流地点には三つの輪中が川を挟んで向かい合っている。北は美濃国の八神輪中、西(図の左手)は同じく美濃国の高須輪中であり、右側の「神明」、「地泉院」という寺社がある所は、尾張国の神明津輪中である。この神明社は美濃・飛騨・信濃から川舟に乗って伊勢参宮をする旅人が、かならず参拝した社であった。また図3は「木曾川並図」(犬山市所蔵)であるが、上から流れてくる太い川が木曾川で、中央下の河川中央部の神明津輪中の所で、木曾川と佐屋川に分岐し、左上のほうから流れるのが長良川で、その両側に八神輪中・高須輪中などが描かれている。

この神明津の合流地点の木曾川・長良川の両岸には、堤防から川の中央部にかけて砂州が大きく広がっている。季節はわからないが、挿し絵に添えられた土朗(琵琶園)の俳句、「川中へ御嶽出でたりほととぎす」から推定すれば、春であろう。この砂州の状況は、まだ雪解け水によって川が増水していない時期のものだと考えられる。そして、その砂州の間を縫うようにして帆掛け舟が行き来している。輪中を取り囲む堤防は土を固めたもので、堤防上には松並木があり、道路として利用されていることがわかる。しかし神明津輪中の堤防の二カ所には川に突き出た形の構造物が見える。これはおそらく水勢を制御するために設けられた猿尾(後述)であろう。

この流域は大小河川が伊勢湾に注ぎ込む。もっとも大きな河川で

ある木曽川は木曽の山々の水を西進させつつ流れ、しかも東西の標高差があるために、相当の急流をなしながら、長良川・揖斐川と合流し、そこに大きな水量をもつ流域が形成された。そこは水の流れが複雑に入り組み、輪中集落が大小さまざま作られた景観をなしている。この絵図は近世後期のものであるので、とくに三川下流域の景観、輪中や堤防の様相は現在とまったく違っている。

(2) 草井の猿尾

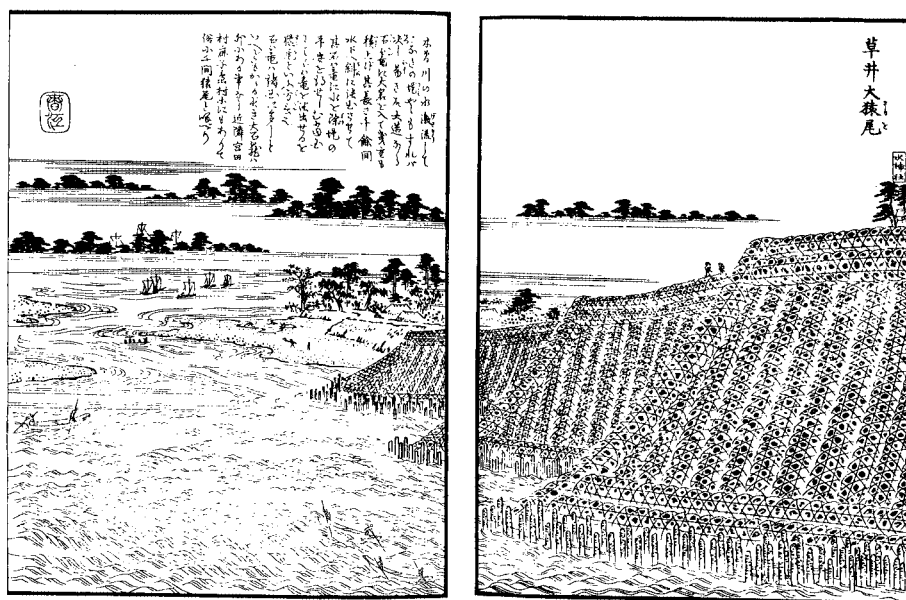
『尾張名所図会』のなかに「草井大猿尾」と題した挿し絵がある¹³ (図4)。草井村は木曽川中流域、犬山城から少し下流に下った場所にある。現在は江南市にあり、草井の渡し跡や木曽三川タワーが立つ治水公園がある。写真1は上流から木曽川左岸を写したもので、左にタワーと現在の堤防がみえる。今猿尾の跡は見られないので、かつての猿尾の場所はわからないが、おそらくこの堤防に沿って猿尾が存在したと推測される。

図3 木曽川川並図 (犬山市所蔵)



この挿し絵は木曽川下流側から上流を描いたもので、犬山城下で川幅が広くなった場所の少し下流にある。「草井大猿尾」の挿入文は次のような記述である。

木曽川の水激流して、こなたの堤ややもすれば決し易き故、大造な



■草井大猿尾 木曾川の水激流して、こなたの堤やもすれば決し易き故、大造なる石籠（いしかご）に大岩を入れて幾重も積み上げ、その長さ千余間、水下へ斜に張り出させてその石籠に水を除け、堤の平安を得せしむ。当国にて石籠を張り出せるを猿尾といふ、方言なり。石籠は諸国に多しといへども、かかる長さ大石籠は外にある事なし。近隣宮田村・鹿子島村等にもありて、俗に千間猿尾と呼べり

図4「草井大猿尾」(『日本名所風俗図会』6より)

る石籠に大岩を入れて幾重にも積み上げ、その長さ千余間、水下へ斜に張り出させて、その石籠に水を除け、堤の平安を得せしむ、当国にて石籠を張り出せるを猿尾といふ、方言なり、石籠は諸国に多しといへども、かかる長さ大石籠は外にある事なし、近隣宮田村・鹿子島村等にもありて、俗に千間猿尾と呼べり

猿尾とは堤を強化するために施される護岸工法の一つである。

『地方品目解』という尾張藩の地方民政の用語を解説した書物によれば、「川通り水当強き所には土築之堤を出し、水を受け刳させ申候、又大石・蛇籠等にて水を刳候をも却而猿尾と申候」という説明がある。

石が詰め籠められた長大な蛇籠が高く、頑丈に積み上げられ、川下に向けて斜めに張り出されている。この猿尾によって川上からの水を刳ねて、水勢を弱める



写真1 江南市草井・木曾川堤防左岸（下流方面をのぞむ）

社が描かれているが、この水神社は現在この場所で確認できないが、草井渡し場跡に現存する水神祠がそれではないかと思われる(写真2)。またこの近くには水神の石碑も存在している¹⁵⁾。

この諸国にも比較するものがないほどの大規模な猿尾であるが、近世のいくつかの絵図にも描かれている。その一つが、木曾川の源流から伊勢湾までの流域をたどった「木曾川川並図」¹⁶⁾(図5)である。図の下部の所に、俵状に描かれた草井村の猿尾、そしてその下流に鹿子島村の猿尾が見える。この下流には宮田村があり、そこ



写真2 草井渡し跡の水神祠

という役割を果たす。そして張り出された猿尾の先には木杭が数多く水中に打ち込まれている様子が見える。この木杭もまた猿尾に刎ねられた水の流れをさらに緩和されることが期待されている。

この猿尾の先を何艘かの川舟が行き来し、また猿尾の上方に描かれている河原は草井の渡しで、一艘の舟が川岸近くに見えている。

この挿し絵の右端には水神



図5 木曾川川並図(犬山市所蔵)

にも千間猿尾が描いてある。

また天保十二年作成の「草井村絵図」¹⁶は『尾張名所図会』と同時期に作成されたものだが、これには「木曽川川並図」で「自分渡し場」とある所をふくめて、草井村と上・下流の村(中般若村・鹿子島村)にわたって、木曽川左岸全体に猿尾が作られていたことを確認することができる。

これらの挿し絵・絵図を見ると、尾張藩領側の強固な治水対策を確認できるし、こうした大規模な猿尾の挿し絵を『尾張名所図会』が描いたことは、尾張藩の治水への関心をうかがうことができる。

三 水を治める(Ⅱ)——水野士淳と新川の開鑿

(1) 新川の開鑿

二〇〇〇年九月十一、十二日の東海豪雨は、名古屋市の北部を流れる新川の堤防を決壊させるなど、多大な被害を出すことになった。写真3は名古屋市西区上小田井付近の新川である。左が南の方角である。この少し下流の南側堤防が決壊した(西区あし原町)。この新川は庄内川の流れを分流するために開鑿された人工の河川である。庄内川は名古屋市の北部で、近世たびたび破堤し、春日井郡の多くの村に多大の被害を出した河川である。

明和四年(一七六七)七月十・十二日にかけての大雨で、尾張藩領内は多大の被害を出した。『尾藩世紀』には「領内諸川堤塘崩壊、

田畑を損害する数百町、溺死二千余人」という記事が見える¹⁷。しかし十八世紀中期の尾張藩における水害はこれだけに止まらなかった。宝暦年間から水害はたびたび起きるようになった。

宝暦元年(一七五一)六月二十七日、春日井郡小牧村に雷をともなった豪雨があり、山津波による土石の流出によって十七カ村の田畑が流失した¹⁸。宝暦三年八月十六日には尾張西部・

美濃南部を大きな洪水が襲い、中島・海西両郡、美濃国今尾・高須の堤防が決壊し、尾張藩の支藩であった高須藩の藩邸も水に浸かった¹⁹。さらに、宝暦七年五月五日の尾張・美濃両国での大水害では、庄内川は大野木・比良・下小田井・枇杷島の各所で氾濫した。

そして安永八年(一七七九)八月二十四、二十五日には、上条・味鋺・比良・大野木各村で庄内川の堤防が決壊して、小牧周辺まで浸水した²⁰。この時藩主徳川宗睦(源明公)は水害状況を視察し、参政人見弥右衛門・勘定奉行水野士淳に庄内川の治水工事を命じ



写真3 新川の景観

た²¹。工事は天明四年から七年（一七八四—一七八七）にかけて実施された。『尾張名所図会』は春日井郡の部の「洗堰」という項目で、くわしく洗堰工事とその功勞者であった水野士淳を紹介した²²。

庄内川通連年の流砂に、川底高くなりて、強雨満水の時、激浪溢れ、堤をそこなひ、小田井・大野木をはじめ、数十村年々水害にあひ、年穀不熟の患ひ甚だしかりければ、天明四年源明公の命を奉じて、水野某工夫をなし、庄内川の堤を長四十間が程半を切りさげ、五合目よりの高水を大蒲沼へ分水し、新川を掘り割り、暴水を通じて、長く損害のうれひを除きたり、洗堰のさまは、大なる石籠を数百重ね置きて、その備へ堅固なるさま、いふばかりなし、しかして後は洪水といへども堤を切る事なく、水難をわすれしかば、その下流に属する村々、安穩に蘇活を得たり、よりて彼の村々の者、水野某が功の莫大なるを知り、官許を得て、文政二年比良村の北、新川堤の上に治水の碑を建つ

庄内川堤の花見の情景を描いた挿し絵をすでに紹介した。そこにも川の中央に砂州が描いてあったが、この場所からすぐ下流に水野士淳がおこなった洗堰工事と新川開鑿工事を実施した場所がある。

水野は流出土砂のため庄内川の河床が上昇し、強雨のときには堤防から水が溢れ、また堤防を決壊させてきたため、庄内川・大江川が合流する地点、味鉢村の堤を長さ四十間にわたって切り下げ、蛇籠

治水・治山をめぐる歴史文化(羽賀)

を数百重ねるという工法で洗堰を築き、庄内川の水が堤防の五合目を超えたとき、その溢れた水を大蒲沼に流し入れ、その水を新しく開鑿した新川へ流すようにしたのである。これにより破堤によって水害を蒙っていた庄内川北部の村々は洪水を免れるようになった。新川の開鑿にともなうて、庄内川下流では、入鹿池から尾北平野中央部を流れる五条川と新川が合流し、庄内川と五条川・新川（合して砂子川²³）は堤を間に介して並行する二つの河川となり、周辺の水害防止の役割を果たすようになった。十八世紀末から日本全国で数多く刊行された名所図会に、こうした治水の功績が書かれた例を他に知らない。たいへんめずらしい事例だということは確かである²⁴。

（２）「生碑」の建立

この新川開鑿工事が終わった後、それが大規模な開鑿工事であり、しかもそれによって多くの村が水害から救われることになったため、水野の功績を顕彰するために、地元民が顕彰碑を建立した。この「水埜士淳君治水碑」は現在、新川北岸（名古屋市区西區山田町比良）の久地野地内の堤防上にある（写真４）。

この顕彰碑は春日井郡比良村ほか二十八カ村の村民が比良村の堤上に建立したものである。『尾張名所図会』には撰文が紹介された。尾張藩でもっとも著名な、しかも記念碑としては早い時期に属するものなので、長文ではあるけれども、撰文の部分引用したい。



写真4 水野士淳君治水碑

愛智春日井郡中有二川、其源一出濃州土岐郡、是為勝川、一出參州加茂郡、是為矢田川、二水會為莊内川、其川縈回莊内而歸于海、明和四年丁亥七月、沛雨傾盆、水潦衍溢、猿投山谷口崩騰、愛智春日井二郡、水災最甚、屋宇漂流、人馬陷溺、而後砂礫羅敷、隄防屢決壞、安永八年己亥八月、水潦復至、衆民昏墊、明公時命駕、視民疾苦而深憂之、使參政人見弥右衛門・小野黍子魚・度支長水野千之右衛門源允士淳專掌治水、於是士淳君首謀其事、精覈水行、比良邑大蒲沼、群邨之深會合于此、因以其沼為施功之載、天明四年甲辰、鑿沼南味鉢堤、就其隄腹築五合石堰、自比良村距海東郡榎津村之間、別疎鑿一巨川号新

川、以殺莊内川水勢、爾後勝川潦踰堤五分、則其潦溢石堰、經大蒲沼入新川、勝川水潦頓減其半、往昔五条川水、歷八屋村會莊内川、故其潦沂五条川、害海東郡、於是塞八屋派口、会五条川水于新川、又塞莊内川口于中須村、乃斷二川至下一色村南、莊内川新川二派、纔隔一堤双歸于海、而群村悉免災三十六年、予每巡視、与老里正仰士淳君治水之功、且嘆歷星霜之久、少壯者今習安居、而無知免災之由、今茲君八十有六、庶民逾頌其德、且祝君之寿考、乞立碑以伝後世、予謂後漢董詡除須昌令、多異政、人為生立碑、今追其故事、不為僭矣、當為君勒碑使民不忘其恩沢、夫子魚君拳士淳君、使君專掌治水、又使造牕令武藤加六・藤原直達為副、量水利相与戮力、土功遂成焉、君独保眉寿至于今、比年蒙恩華、事績益彰、庶其名与石不朽、是以立碑比良隄上、作頌、其辭曰

(中略)

文政二年己卯十一月

張藩大代官樋口又兵衛中原好古謹誌

『尾藩世紀』に掲載された碑文では、樋口の「謹誌」の文字に続いて、建立に参加した二十八カ村の村名が列挙されている²⁰⁾。比良・大野木・味鉢・豊場・平田・上小田井など、庄内川右岸と大江川・木津用水兩岸の村々であった(現在の西春日井郡豊山町・師勝町・西春町の南部、名古屋市西区の北西部にあたる)。文政二(一八一

九) 年十一月の日付のある撰文を書いたのは、大代官樋口好古である。樋口は領内の町村現状調査書、『尾張徇行記』を編纂した経済吏僚である。

明和四年・安永八年の二度の大水害後に新川を開鑿し、治水事業に比類なき業績をあげ、関係の人々に多大の利益を与えた水野の徳を讃え、また長寿を祝うために記念碑は建立されたのである³⁶。水野の事績を顕彰し、その名を石に刻んで人々の記憶に永遠に留めることに目的があった。水野の門人で、『岷山先生治水伝』の著者島重清は「義の宜しきに随て功を国家に顕はし、人欲の私を去て心を公に用ひ給ふ³⁷」と、水野を評している。顕彰記念碑が建立される対象となる人物の功労基準がここに示されている。「義」と「公」という規範である。

水野の長寿を祝うことが建立の目的の一つだったが、彼が死去したのは文政五年(一八二二)二月十六日のことである³⁸。つまり、この記念碑は「生碑」だということになる。「生碑」とは「生祠」³⁹と同じく、顕彰される対象者が生きている間に記念碑として、また神として祀られるという形式である。樋口の撰文には「後漢董詡除須昌令、多異政、人為生立碑、今追其故事」とある。「董翊」は「董翊」の誤りだが、山東省の須昌県の県令に任命されたとき、優れた政治を行ったことを表して、人々は董翊存命中に石碑を建立した。この故事にならって水野治水碑が建てられたのだと言っている。つまり生碑とは中国古代の事例を模倣したものだった(『後漢書』

卷七十六「循吏列伝」第六十六)。

(3) 水野士淳の治水論

治水の功労者として評価された水野の治水観、「山川の政」を知ることができる文献が、沢重清が天保四年三月に著した『岷山先生治水伝』である³⁰。この書は東海地域の治水・治山史研究にとって重要な文献の一つであり、明治期以降の西欧の技術・工法を取り入れた治水・治山論と比較しつつ、その内容が検討されるべきだろう。水野は水勢の強弱、河川の流れ、川の浚渫、悪水の除去、新田開発、工事作業者の使用、植林などに分けて、それぞれについて詳しく論じている。

彼の治水論は「水勢」の理解から始まり、全体を通ずる基礎がそこにある。水は高い所から低い所を求めて流れるが、その流水には「剛柔動静」という性質と、「深淺曲直」という形体がある。この流水の性質と形体とによって河川が作られる。だが河川流域には時代の進展によって人の力が加わることで、自然の流れが改変せられる。山野の開拓、堤防の築造、山林の伐採などであり、こうした人為的な作用の結果、河川の流れに変化が生じる。こうした河川環境の変化が洪水などをもたらす原因となる。

治水にとって最大の問題は、土砂が堆積して河原にできる洲である。洲ができる原因について、『岷山先生治水伝』は次のように論ずる。

年々山谷あれて山沢の神氣衰へ、湧出る水自から乏しくして、流水も是に随て弱くなれば、自然と屈曲をなして、深かりし川も次第に浅くなるものなり、又潮汐の至り止る所より洲付となるものとて、水源の水勢衰へては川に常水乏しきゆへ、潮の引くにつけても洲を押貫く水勢なくして、さながら其所より洲高となれば、止事を不得堤に笠腹を置き^{笠腹とは堤に土を置て夫を付るをいふ蓋}大水を防ぐといへども、出水の度々土砂を多く谷々より出して、終に流水の地より高く流れゆく様になれば、何ほど笠腹を置いて堤に力を添ゆるとても、彼の山をも抜くべき大水の勢ひを以て、其屈曲をなしたる堤へ水衝当れば、忽ち堤を破りて水災^災年々不止、故に直流となしたるもの也、直流となれば、大水速かに通じて堤にあらず、さりながら常水の勢ひ弱くなりて、弥々洲の積る事は多し

山の荒廢は山のもつ保水力を減退させ、湧き水を減少させ、水勢を弱くするため、川は屈曲して流れるようになる。そして満ち潮の止まる場所で洲ができ、引き潮の時も水勢が弱いために洲を押し流せず、堤防を造っても出水のたび毎に土砂により河底が高くなる。堤防は築造されるが、「山抜け」(山津波、土石流)が起きるような大水の際には、屈曲した堤に水が当たり、堤が破れることになる。水野は洪水を避けるために、洲高となった川を改良するいくつか

の方法を提案している。新しい川を開鑿して分水する方法であり、また他の川の水を引き入れて水勢を増す方法もある。あるいは河床が高くなり砂河原となった中央に水道を開き、毎年その水道を深くして薬研堀のような川筋にする方法もある。川浚いをおこなって水勢を強くすることもできる。しかし、こうした方法はいずれも一時的な、もしくは不十分な治水策だと水野は考えていた。「水源の山谷を大切に養ひて水勢を増す」ことが、長い時間がかかっても必要なことだと論じた(後述)。水野が実施した新川の開鑿による庄内川の分水もまた、長期的に見ればその効果は失われたのであった³¹⁾。

(4) 治水協同体の神話

大がかりな新川開鑿工事が尾張藩主以下の並々ならぬ意思で実行されたことは、天明五年四月二十二日徳川宗睦みずから工事現場を視察したことに現れている³²⁾。先に述べたようにこの時期、災害は頻発し、多大な被害を与えていた。こうした度重なる災害への対処がきわめて重要な藩政の課題となり、しかも天明三、四年には名古屋は米価高騰による深刻な飢饉状況にあった。水害と飢饉という天明期のただならぬ社会状況のなかで、治水事業が実施されていた³³⁾。

こうした社会状況のなかで、治水工事は困窮した人々を救済する「御救普請」という意味を有した。そして重大な災害(洪水と飢饉)に直面した人々が示した行動のなかに、災害に対応する身分をこえ

た協同性とそこに生み出されてくる神話を見いだすことができる。新川開鑿工事が開始された前年、天明三年も庄内川の洪水があり、そのときの宗睦の熱田神宮への祈願、それに感謝した川浚えと自普請についての記録が残っている（要約）³⁶。

天明三年秋、大雨によって庄内川に洪水があり、大野木村の堤が崩れようとしたとき、明君（徳川宗睦）はこの災害は君主としての不徳によるものだと、熱田神宮に雨晴の祈誓を命じた³⁶。熱田の霊神はこれを受納し、にわかに神風が起き、たちまち雨がやみ、雲が晴れた。社家の人々もこれには奇異の思いを抱き、また役人は数百人の人を指揮して、大野木の堤を築かせ、洪水を防ぐ努力をした。この堤の周辺の農民たちは神明の徳で風雨が止んだことは有り難く、また明君様が下民を愛する仁徳によるもので、このお礼を申し上げたいと考えた。早魃の時には神仏に雨を祈り、雨が降れば馬を出してお礼をする風習があるので、晴雨の違いはあるけれども、「明君様を神様と崇め奉り、御礼馬を出して」御郭内西鉄門、太鼓櫓のあたりを引き廻り、城内を拝礼しようとした。そして枇杷島橋まで大勢の人が馬を引いて集まったところ、下小田井村の庄屋善右衛門、枇杷島村の庄屋孫八は大切な場所に大勢が馬を引いていくことは不敬の至りであると、これを制止した。人々もこれに承服して、帰っていった。押切村の庄屋大助は人々の本意を遂げさせ

たいと考え、郭内は恐れ多いので、新馬場辺で城を拝礼し、仁恵を謝し、それから熱田に参詣して、神徳を仰ぐことを提案しようとして、枇杷島橋まで行ったがすでに人々は帰った後だった。その後、枇杷島村の利助は明君への御礼のため、堤に関わりがない町にも呼びかけて、川浚えの自普請を行うことを思い立った。十二月四日、町在銘々の印を付けた幟を立て、千人余の人が集まり、木遣りや長持ち歌を歌い、川を浚え、土砂を運んだ。このとき鷹狩りの帰りの明君が通りかかり、この普請を見学し、酒肴を与えた。そして自普請が終わった後には、大助・利助にはお目見えが許され、褒美を下された。

『尾張名所図会』には、「大雨降りつづき、庄内川洪水にて、大野木堤大いに崩れ落ち、危き事現なく、人夫を下知して防ぐといへども、風雨あらく面打ちて、働く事あたはず、終に堤切れ入りぬべく見えけるを、源明公聞かせ給ひ、熱田大神宮へ雨晴の祈誓をかけさせ給へば、俄に神風吹き出て」と、庄内川破堤の緊迫した状況で熱田神宮への祈禱が命じられたことを強調して書いている³⁷。

藩主宗睦が熱田の神に祈願をして、それがかなえられたとき、人々は宗睦の神との交感能力を「崇め奉り」、藩主を神と同格と見なしたのである。熱田の神と神格化された藩主への返礼として「御冥加普請」のための自発的なエネルギーが組織された。そして工事の途次には宗睦の工事視察があり、竣工して後には宗睦から褒賞が与え

られた。この藩主と領民との間の協同関係によって、水害という危機から領内は救われたのである。この領主と領民との治水をめぐる協同関係を象徴的に示す砂持ちの神話が語られたのである。

藩主や工事指導者の神格化は、治水工事にあたって「公の心を用ひ私を去り、寛仁を旨として人歩（人夫）の心を和同³⁸」させた結果である。この治水工事参加者の「心の和同」こそが、堤防工事・川凌えという現実的な施策とともに、治水を実現するもう一つの要因であった。治水指導者の「公」と工事参加者の「心の和同」によって、水を治めるための、身分を越えた協同体が一時的にしろ現出した。その協同体のシンボルとして藩主・治水家の神格化があったのである。

小山田与清は『松屋筆記』のなかで、「御代官之碑を建て土民祭祀する事」という一節を書いているが、そこでは「近來有徳の御代官死して後、土民その墓を作り、碑を建、或は叢祠を建て祭ること有」として、『後漢書』許楊伝の「百姓思其功績皆祭祀之」と引いて、その起源に言及している³⁹。小山田は寛政期に江戸幕府の代官を勤めた竹垣三右衛門の碑を下総の農民が祀った例を紹介している。こうした寛政から化政期にかけての有能な幕府代官に対して、任地の百姓が生碑・生祠を建立した多くの事例を村上直が紹介している⁴⁰。「生碑」や「生祠」は十八世紀末から十九世紀初めにかけて、全国的に出現しはじめていた。徳川宗睦の神格化、水野士淳の「生碑」建立も、そうした全国的な動きの一環であった。そこには18世

紀末以降の君主論をめぐる問題提起、民政をめぐる政策的模索という政治的意味が含まれている。

四 山を治める

(1) 明和四年（一七六七）の「山抜け」

尾張国における災害の歴史を見たとき、明和四年（一七六七）が大きな転機となったことはすでに指摘した。「水埜士惇君治水碑」にも、「猿投山谷口崩騰、愛智春日井二郡水災最甚」と、猿投山の谷筋で「山抜け」が起き、愛知・春日井両郡に甚大な被害が出たという一節があった。猿投山の西の麓に位置する春日井郡赤津村では、「明和四亥年洪水以来田畝多ク砂礫ノ為ニツブレ、今ニテハ田畝凡ソ過半モ減耗セシ」状態となったという⁴¹。

この明和四年七月十二日の水害（山抜け・山津波）について、春日井郡瀬戸周辺の史料でその様相を確認しておきたい。

明和四年は春から六十年來未聞の大干ばつとなった。水枯れする稲もあったため、瀬戸周辺の村々では用水確保のための不審番をしなければならぬような状況も生まれていた。また春日井郡赤津村の雲興寺では、雨乞いの祈祷・般若経転読などを連日執行していた。しかし七月十二日は一転して大洪水に見舞われることになった。この日は朝から雨が降り始め、昼過ぎから夜にかけて大雨になった。そして雲興寺裏山が「山抜け」した。その時の生々しい状況につい

て、雲興寺の記録は次のように記している⁴²⁾。

皆朝より雨降り、昼頃より大雨、暮方より別大雨ニ相成、車軸之如く降り続き、夜半過頃山鳴り谷答へ、山川一同ニ震動シ大洪水山津波ニ而、門前水之高サ式丈四五尺程、門柱壹尺五寸程水付、向ハ山ノ岸壹枚ニ流れ出て、大門先之川筋松木石杯ニ而埋れ、砂石高ク門之地形と取合、其上御制札石垣・万霊塔・禁牌石・石燈籠・鎮守社ニヶ所、並木松杉大小忽チ押シ流レ、白坂中通之人家之分不残流失す、夜も八ッ半頃共相見、水も暫く流れ止ミ候故、寺中不残統松桃灯等ニ而大門前廻り、甚之右衛門前より田路を通り裏門前より帰る、然ル処衆寮を通り越候へハ、忽卯塔之上山拔ニ而危き処逃れ、召仕兩人暫後れ通り難く、夜明ケて山ノ上へ通り帰る、夫より裏山無心元ニ付、開山堂へ行き聖像迎んとする所ニ、忽客殿戌亥ノ角山抜け、客殿角柱壹本押折り、衆寮將軍方仏壇裏柱四本押倒レ、盤石土砂西ノ間へ押込ミ、五尺余り椽下壹枚ニ畳迄泥土と相成り、下祠堂仏壇押倒レ、是も泥土内へ押込む、聖像仏壇御位牌等早ク取置候故別状無シ、暫く有て又々山川震動、忽チ大津浪ニ而大門向ノ山岸壹枚ニ押流レ、此節大門並木等不残流失、白坂入口ニも雜木壹枚しど^(ツツ)り有之処、壹日ニ忽大河原となり、通路無之、米銭寺山を越て見舞之人々参り候

治水・治山をめぐる歴史文化(羽賀)

この記録によれば、雲興寺門前を流れる紅葉川の水位は七メートル以上にもなり、寺の門も四十五センチメートルほど水に浸かったという。川の向こう側の山肌が流れ落ち、川は木や大石で埋まり、また高札の石垣・万霊塔など寺の施設も押し流されしまった。そして寺の客殿に向けて「山抜け」があり、客殿の角柱や衆寮の柱を押し倒して、土砂が堂内に入り込んだ。この直後に大震動が起き、寺の向こう側の山がふたたび崩落した。

こうしてこの周辺は雲興寺(図6参照)開基以来の被害を出し、門前の並木・田畑はすべて河原になり、「大難洪前代未聞」という状況となった。赤津村白坂で家屋流失した者は七十人に及び、こうした罹災者に対して雲興寺では数日にわたって施行を行った。尾張国中の六〇七割が被害に遭い、田畑家屋の流失の被害に加え、溺死者は七〇八百人に及んだと、雲興寺の記録にはある。白坂村でも溺死者は十一人、隣の赤津村では六人であった。また多くの田畑家屋が流失したため、村は騒然たる状況にあった。雲興寺の門前を流れる紅葉川は洪水前は川幅三間程度だったのが、洪水後には十二、三間ほどに広がった⁴³⁾。

尾張国内では十八世紀中期、このように大規模な「山抜け」をともなう大きな被害にたびたび見舞われていた。とくに明和の「山抜け」は尾張藩政に大きな影響を与えたことは疑いない。『尾藩世紀』は次のような逸話を伝える。藩主徳川宗睦は領民の死者・家屋流出という被害が大きかったため、領民と苦楽をともにするために、洪



図6「雲興寺境内図」(『張州雜志』第12巻より)

水翌日の朝食を食べなかったのだと。そしてこの逸話に続けて、「夫よりしきりに御工夫をめぐらされ、水道分理の事ニ御心を尽」くされ、人見と水野が新川開鑿を実行し、洪水の被害を除いたのだと書いていた。水野の治水家としての活動を生み出したのは、明和四年、さらにはそれ以前の宝暦期の水害だった。

(2) 荒廃した山々

図7は、十八世紀中期の尾張の地誌、『張州雜志』(内藤東甫著)の「赤津風景」である⁴⁵⁾。赤津村は瀬戸村から一山西に越えたところに位置する村で、瀬戸村と並んで尾張領内でもっとも著名な陶磁器の生産地であった。図の右側には二基の登り窯が見えている。赤津山はまったくの「はげ山」であり、明和四年の「山抜け」があった雲興寺山、三河の猿投山もその頂上部分は山肌がむき出しの状態である。

同じ地誌に掲載されている挿し絵をもう一枚紹介しよう。「瀬戸村図」である(図8)⁴⁶⁾。手前に瀬戸川が流れ、西の方角に当る山側に、黒い煙を出している大規模な登り窯が見える。図の左にも小さな登り窯が見えている。煙の出ている登り窯のある山肌はほとんど木が生えていない。周囲の山々もそうである。

また、『尾張名所図会』のなかに瀬戸地方の山の荒廃をうかがわせる挿し絵がある(図9)⁴⁷⁾。愛知郡山口村の山口神社と本泉寺を中央に、鳥居と本社の上に瀬戸川(庄内川)の支流に合流する山口川

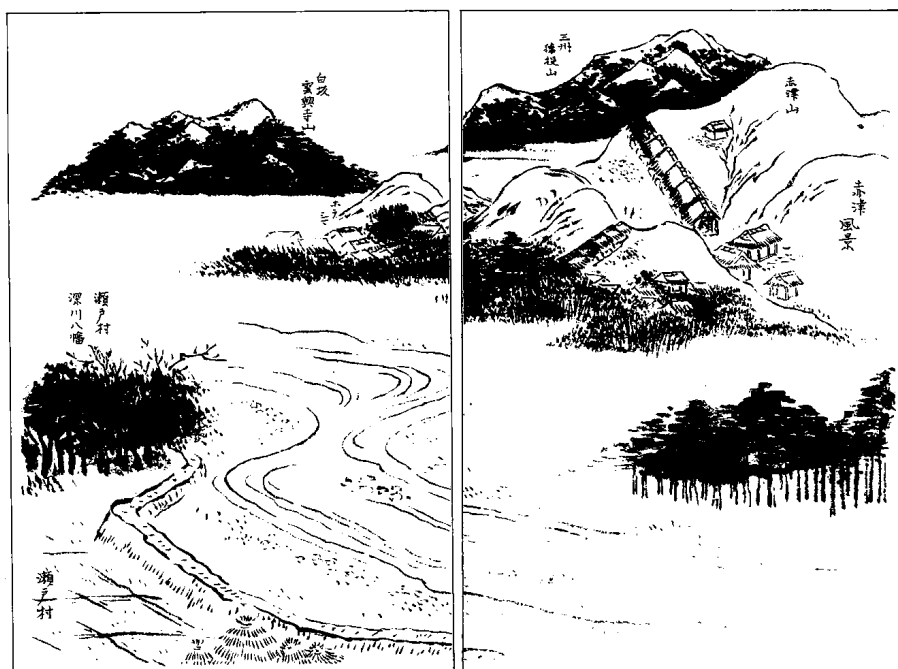
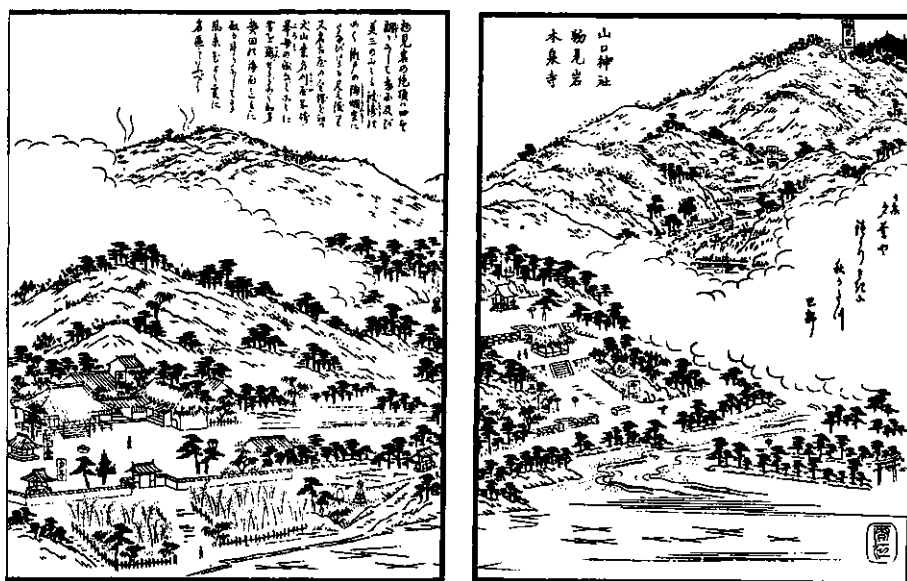


図7「赤津風景」(『張州雑志』第12巻より)



図8「瀬戸村図」(『張州雑志』第12巻より)



山口神社 物見岩 本泉寺 句集 夕暮や鐘よりさきに秋がたつ 巴静 物見岩の絶頂は四望明(ほがら)か
にいて、当国及び美三の山々も波濤の如く、瀬戸の陶畑空にたなびけるも見え渡り、また名古屋の金城を初め、
犬山・桑名・刈屋・岡崎・挙母(ころも)の城など所々に雪を点ぜるが如く、知多・熱田の海面まで手に取るば
かりにして、その風景尤もよく、実に名区といふべし

図9「山口神社・物見岩・本泉寺」(『尾張名所図会』6より)

が描かれている。その上流に海上洞の集落が見え、さらにその沢をさかのぼったところに物見岩がある。本泉寺の遠く北の山からは、瀬戸村の陶器窯から出る煙が上っているのが見えている。この挿し絵の物見岩から瀬戸村にかけての山々にはほとんど樹木が生えていない。十九世紀中期のこの地方の「はげ山」の様相が描かれていると考えられる。

十八世紀中期から十九世紀中期までのこの地域の「はげ山」の状況は、どのような要因で生じたのだろうか。一九二〇(大正九)年五月に書かれた「愛知県の砂防沿革」は、近世から明治初めにかけての瀬戸地方の山林状況について、次のように概要を書いている(要約)⁴⁸⁾。

陶器生産地としての瀬戸地方では、瀬戸・水野・上野・赤津・山口各村で山林は燃料生産地となり、木を濫伐したために、山肌が露出し、流砂が川を埋め、水害を引き起こすことになった。宝暦年間沿川の農民は水害に苦しみ、陶業制限の訴えをなすに至った。そのため天明二年春日井郡水野村の尾張藩代官所は山方係を置き、始めて砂防・植樹の制度を設け、同時に陶器生産を奨励する対策を講じた。毎年三月下旬に赤楊を山麓に植え、翌年には山腹に松苗を植えるという隔年二種の植樹を実施し、また毎年各村では水源普請を行った。これが現在の砂防工事の嚆矢である。この地方の山地では住民が山林を管理して、時々

巡視して樹木を保護してきた。しかし、しだいに山林保護の制度が緩んできた。当時の伐採方法は間伐であったが、天保年間の洪水⁴⁹後は堤防修復のため、堤防備林と称して堤防用材として準備してきた山林から数百本を伐採し、その後も堤防修復を名として伐採する悪例となった。その後も濫伐は甚だしくなり、文久二年（一八六二）には松材二万九千本、翌年には二四〇〇本を伐採し、他方で盗伐の弊害も生じ、陶磁器燃料として枯損木の名義での伐採も許可されたことも加わって、山林荒廃は放置できないほどになった。このため慶応年間には管理人を置いて、監視を強めたが、効果を見ないまま明治維新を迎えた。維新のために林制が崩れ、濫伐・盗伐が至るところで起き、明治七、八年（一八七四・七五）にはほとんど伐採し尽くしたような状態となった。

陶磁器生産地としての発展が進むにつれて、燃料材の乱伐の結果「はげ山」状態となり、同時に土砂流出で河床が高くなったために水害が起きるようになった。天明二年以後ようやく尾張藩は山林の保護策として植林を始め、村々でも砂防工事が実施されるようになった。しかし天保期以降には再びさまざまな名目での山林伐採が行われ、盗伐もあって荒廃が急速に進んだ。しかも維新後には近世的林制が崩壊したため、明治初年には完全な「はげ山」状態となった。

（3）山林保護策と砂防工事

しかし、天明年間の山林保護策の着手より前、先に引用した『岷山先生治水伝』は、明和の「山抜け」に言及し、その原因を探るとともに、独自の山林保護策を提案していた。

『岷山先生治水伝』は明和の「山抜け」の原因とその対策について、次のように述べる⁵⁰。

愛知・春日井の山は、山浅くして岩なし、其上松計り多くして雑木茂らず、岩なき浅き山に覆ふべき雑木なき時は、夏は日当りて山を渴かし、冬は凍あがりて土を砕き、春雨に逢ふては土砂を一時に押出して、川々を埋る事夥し、されば今、此土砂を取り去るは尤も難しといへども、金銀余りありて人力を多く用ゆるともなしがたき事也、然ば水源の山谷を常々養ひ、雑木を茂らすべき事に能々心を尽すべし、雑木茂る時は水気自から生じ、其上雨降れば落葉に水を含み、谷水常に絶ずして用水乏しからず、又洪水の節、水勢にて土浮立つといへ共、雑木の根にて土をからみ、破らるべき土も是が為に引締められ、山の抜け崩るゝ事有べからず

尾張東部の丘陵地帯における「はげ山」は、十八世紀中期以降の濫伐・盗伐によって生じたものだったが、他方で土壌の地質的な特

徴と林相にも原因があった。『岷山先生治水伝』では地質的・林相的な特徴として、「石なき浅い山」に松ばかりが生えて、雑木がないことを指摘している。このために山土の崩壊と流出が起き、その結果河川は土砂で埋まること、この流出土砂の除去は困難であること、それを避けるために土砂の流出をくい止める雑木の養成が必要だと論じた。

松の樹木としての特性は、伐採した後にひこばえがなく、根が朽ちるのも早い⁵¹ため土壌を動かすこと、松は「陽木」で土壌を乾燥させること、つまり落ち葉によって腐葉土が生まれず、かえって松に降った雨が田畑に流れ出れば土地を痩せさせることにあると、『岷山先生治水伝』は述べている。「はげ山」修復の方法として、椎・榎・榊・柳・檜・榊・榎などの幼樹を山の高低や寒暖に応じて植林し、長期的な観点から土砂の流出をくい止めることを提案した⁵²。つまり諸木の混在した複合的な林相を造るべきだと論じたのである。

こうして十八世紀末に治山策は提起されていたが、維新後の「はげ山」状況の進行に対応するために、明治十年代になると砂防工事は内務省土木局雇のオランダ人技師デ・レーケの調査などもあり、実験的に実施されるようになった。この工事は東春日井郡瀬戸町から愛知郡山口村へかけての山地において実施された内務省事業としての植樹的砂防工事であった。そして、砂防工事が本格的になるのは、一八九七年三月の砂防法の制定をみた後のことであり、愛知県

では一九〇〇年から本格的な工事に着手した。そして一九〇五年には愛知県は帝国大学農科大学教授河合鈿太郎へ砂防工事について調査を依頼し、帝大招聘教授アメリカ・ホフマン設計の工事が実施に移された⁵³。その結果、愛知県の荒廃した山地は植樹によって大きく回復することになった。

近代治山史については再検討すべき事柄もあるけれども、こうしたなかで注目されるのは西欧の土木工法・技術に学んだ林学技師たちの治山観である。最後にこの点に若干言及してみたいと思う。

むすびに——「河川先生」の人間社会への批判——

尾張地域の砂防の歴史を振り返ったとき、そこに登場するのはオランダ人土木技師デ・レーケであり、ドイツ人土木学者であるホフマンであり、また帝国大学農科大学教授河合鈿太郎である。砂防事業を直接担当し、指導した愛知県の林務技師に言及されることはない。しかし、愛知県にも「砂防工及利益」などの論考を書き、治山政策を推進した三溝謹平や、「本県砂防林業界の先覚者」と称された丹羽嘉がいる。こうした愛知県技師たちの治山への取り組みも検討されていいのではないかと思う⁵⁴。

丹羽が一八九七年九月におこなった林業に関する談話は、治水・治山思想の点からたいへん面白い内容をもっている⁵⁵。この談話はこの年七月丹羽が砂防工事の視察のために岡山県に出張し、その帰

途奈良・滋賀両県においても視察した報告である。丹羽にとって、植林事業の結果優れた林相を見せるようになった岡山県の治山事業は先進モデルというべきものであった。そして特に模範的な実践事業をおこなっている県下二カ村の実例、砂防工事方法を紹介しながら、砂防工事は単なる土木事業ではなく、「山ヲ天性ノ山ニ恢復セシメテ土砂ノ流出ヲ防止スル」ことに加えて、「山ヨリモ収益ヲ挙グルト云フ様ニ仕向ケテ行ク」ことが必要だと論じた。丹羽は山林の恢復によって収益確保をめざす砂防事業を「山林砂防」と命名して、その意義を説いたのである。

しかし丹羽の談話で興味深いのは、啓蒙的な手法で治水・治山観を提示したことである。丹羽は「河川先生」、「農業君」、「海魚君」、「山林様」など、山・川・海や産業従事者の擬人を登場させて、対話形式で現状の治山や砂防・植林をめぐる問題を議論させている。

かつては「農業君」にとって、「河川先生」は「天与ノ善者」、「神」であったが、最近となって「河川先生」はたいへん増長して悪水を提供したり、土砂や雑物を水に混ぜたりするなど、「天命ニ背キタル仕打」をして、迷惑この上ないありさまであると、「農業君」は非難した。この「農業君」の意見に「海魚君」も賛成し、「河川先生」は以前は「海魚族」にも「甘キ食物」を与えてくれたが、近頃は食物もくれず、さらに「兄弟分ノ山林様」も仲間に入れて、「海魚族」にもっとも必要な樹木を伐採し、土砂により海も埋もれて現在地には居住できなくなってきたとして、彼らの残酷な仕

打ちには「被害者ハ協同シテ是非共嚴談」しなければならないと発言した。

この発言に同席していた「衛生君」、「風致君」、「工業君」、「商業君」などが賛成したところ、「河川先生」は立腹して、自分も大いに被害者だと反論した。世間が不要の汚穢物を投げ入れ、また洗濯などのため、最近では至る所の川が汚れ、あるいは暴れて人命や家を失わせている。農地や海へ好んで被害を与えているのではなく、天性に背いて、河床を高くしているわけでもない。「河川先生」はこの汚名を雪ぐため、また兄弟分の「山林様」を擁護して、問題の根本には人間の乱暴行為があるのだと強い調子で述べる。

山林ハ万物ヲシテ安泰ニ經世セシムル厚德者デアル、然ルニ近年非常ニ零落シテ、我体スラ保ツコト能ハサル程ノ始末ニ陥ツテ居ルト云フノハ、人間ト云フ無謀者ガ、乱暴ニモ鴻恩アル山林ニ対シ無暗ニ衣服ヲ奪取ツタリ、疵ヲ負セタリスル、山林ハ辛苦シテ単物ナリ檻樓ナリ着テ護身スル、スルト人間奴ガ来テ剥奪シテ行クコト極度ガナイ、為メニ山林モ到々力盡キテ裸体ノマ、デオル、故ニ冷ニ当ツタリ、暑氣ヲ受ケタリシテ、自然ノ脈搏モ異動ヲ来タシ、温度モ濫高下スル所ヘ風ガ吹ケバ皮ガ破レル、雨ガ降レバ肉ガ殺ケ、段々ト瘦セテ山林ノ病症ハ益々重態トナル、随テ縁固アル風伯雨伯等ニモ影響シ、激変ヲ生ジ自然ヲ保ツコトガ出来ナイコトニナツタ、倘シ山林ガ元来ノ姿

デアツタナラバ、脈搏温度ニモ異状ヲ来タサヌカラ、他ニモ變動ヲ生セナイノデハナイ、生ゼサセナイ、山林ハ高地位ニ居ルダケアリテ、他ヲモ制御シテ来タ、此第一尊イ所ノ制御者ニ対シ無謀ナル人間奴ガ治世ノ要素タル山林ト云フ、コレヲ知ツテカ知ラズカ知リマセヌカ、濫暴シタルタメ、万物ト云ヘバ人間モ無論這入テオル(人間モ今日テハ前非ヲ悔イテオルソーデス)、悉ナ不幸ヲ蒙ルノデゴザル、諸君如何デス、斯克申シテ見マスレバ罪惡ハ人間ニアロウト思フ

「河川先生」は、人間の乱暴さが山林を侵害し、山から「天性」のあり方を剥奪し、「風伯雨伯」にも影響を与えた結果、自然の循環が乱れたことを主張した。この罪惡は人間にあるという「河川先生」の発言に一同はそれまでの誤解を陳謝し、協議の上で「人間ヲ復旧セシムル」行動をとることとなった。丹羽は結局、山林、河川、農業、海などに損害を与えてきた人間の行為に目を向けさせ、人間の反省とそれによる自然の再生の必要性を論じ、こうした擬人化した話を通じて、広く理解を得ようとしたのであった。このような自然・環境の再生と治山の思想がどのように形成されてきたのか、また水野士惇の治水・治山観との比較を含めて、今後検討したいと思う。

『尾張名所図会』を資料として、そこにどのような河川や治水・治山の様相が書き込まれているのか、またそれに関連して、洪水や

その後の大規模で、困難な治水工事を遂行する上で出現した治水協同体とそこに見られる神格化・神話について、また近世から近代の治水・治山思想について検討してきた。治水・治山、自然の変貌と環境の再生といった問題に内在するさまざまな論点を、いわば羅列したような形でしか提示できなかった。治水・治山思想といっても、水野や愛知県の山林技師たちの議論とは別に、民間の土木技術者の考え方や、山間や河川流域に住む人たちの技術や考え方、あるいは河川・山をめぐる民俗文化も当然考察される問題としてある。「地域環境史」という枠組みを方法的に明確化することを通じて、それらの諸問題を解明したいと考える。

注

- 1 溝口常俊『『地域環境史』研究構想』溝口・高橋誠編『自然再生と地域環境史』名古屋大学環境学研究科、二〇〇五年五月、七一―七頁。
- 2 「瀬戸地方砂防工事状況」『新愛知』一九二二年八月一四日号。
- 3 羽賀祥二「一八九一年濃尾地震と死者追悼」『名古屋大学文学部研究論集』史学45、一九九九年、「治水の神の誕生―『宝暦薩摩義士』と木曾三川流域―」『歴史学研究』七四二、二〇〇〇年、「明治後期愛知県の治山対策」前掲『自然再生と地域環境史』、「宝暦治水工事と〈聖地〉の誕生」『名古屋大学附属図書館研究開発室紀要』二、二〇〇五年。
- 4 『尾張名所図会』は尾張藩領の地誌『尾張志』の編集と並行して進められたもので、編纂には尾張藩士岡田啓、枇杷島の町人の野口道直、そして画工として小田切春江が加わった。前編は天保十二年(一八四一)十

一月に完成し、同十五年二月に刊行された。しかし後編の刊行は明治十三年（一八八〇）である。本稿では『日本名所風俗図会』6（角川書店、一九八四年）所収のものを利用した。また本論中の挿し絵も本書からの引用である。

5 『尾張名所図会』二五九頁。

6 同右。

7 『尾張名所図会』四二七頁。

8 同右書一七七頁。

9 同右書二五二頁。

10 『愛知県災害誌』愛知県、一九七〇年、一〇三頁。

11 景観のすばらしさ、「絶景」もある。玉野川（庄内川上流）の溪谷の美しさ、山水の奇観もまた、文人たちに注目された（『尾張名所図会』三九一―三九二頁）。

12 同右書三三五頁。

13 同右書四二六頁。

14 「地方品目解」『名古屋叢書』第十卷、名古屋市教育委員会、一九六二年、四六三頁。

15 草井渡し跡にも現在、水神社、灯籠（「村中安全」「船乗連中所持」）や溺死者供養の地蔵などが存在している。ここを含め木曽川左岸には、犬山城の下からいくつかの水神社や水神碑がある。

16 「天保十二年葉栗郡草井村図面」「宮田用水史」宮田用水普通水利組合、一九四四年、附図7。

17 『尾藩世紀』『名古屋叢書』第三編第二卷、名古屋市教育委員会、一九八七年、四〇三頁。この時庄内川の支流である矢田川の堤は猪子石村で破れた。このため翌明和五年一月から「矢田川違普請」が開始された（『編年大略』『名古屋叢書』第四卷、名古屋市教育委員会、一九六二年、三七九頁）。この「川違普請」は矢田川の水を新たに掘り割りした川に分流すること、すなわち河川分水工事をいう。「尾藩世紀」の明和五年正月条にも、「矢田川瀬違を命せらる、着手中途にして止む」とある（前掲『尾藩世紀』四〇四頁）。

治水・治山をめぐる歴史文化（羽賀）

18 前掲『尾藩世紀』三八七頁、前掲『編年大略』、三六八頁。

19 前掲『尾藩世紀』三八九頁、前掲『編年大略』三七九頁。

20 以上、一八世紀中期の水害については、『名古屋市史』政治編第二（名古屋市役所、一九一五年）二〇八―二二頁、『新修名古屋市史』名古屋、一九九九年、四五〇―四五三頁を参照。

21 安永八年八月条には、洪水のため領内の田畑に被害が出たとの記事の後、国奉行入見弥右衛門と普請奉行水野千之右衛門に治水事業を命じたところ（前掲『尾藩世紀』四〇四、四〇九頁）。

22 『尾張名所図会』三六三頁。

23 この砂子川について、「天明年中、水野某治水のために、官命を蒙り初めて地を決り、新たに分流せし大川なれば、魚鼈多く、商船も往来し、この川数里の間、左右の千村万落水難をのがれ、五穀豊熟の安養を得る利民第一の新川なり」と、分流地点のみならず庄内川下流域でも開削による治水・生産への貢献があったと、『尾張名所図会』は記す（二五一頁）。

24 河川を中心的な題材とした名所図会として、たとえば暁晴翁『淀川兩岸一覽』（文久三／一八六三刊）では、京都から大坂までの淀川兩岸の堤防の様子をうかがうことができ、その点ではたいへん興味深い挿し絵が多く載っている。しかし治水については、守口の少し上流の河内国仁和寺村の渡しにある「点野」（しめの）について、淀川の大洪水の時に堤防が決壊したこと（点野切）や、摂津国三島江村の付近では水勢が弱く土砂が滞留するため、通船の妨げとなる洲を浚えるために川堀り人足が出ることなどに触れている程度である。後者の話も淀川治水を取り上げているのではなく、川堀り人足が手当てを船客から徴収している様子を淀川筋の風物詩だと述べるのみである（『日本名所風俗図会』11、角川書店、一九八一年）。

25 前掲『尾藩世紀』四一七―四一八頁。

26 一八八三（明治十六）年九月、新川洗堰の修理を記念して西春日井郡新川沿いの村によって「修理洗堰碑文」が建立された（愛知県令国貞廉平篆額、村瀬太乙・丹羽助十郎等撰文）。その撰文には、「所謂浴聖明之沢、仰賢良之治者、愈可以徴也矣、因建碑録其事蹟、併記所請願之村名、

以供他日記念云」とある。また一九二一(大正十)年には新川町・清洲町・西春村などの有志が、水野の死没百年祭を治水碑前で挙行している(『新川町誌』七四〇―七四一頁)。

27 「岷山先生治水伝」『名古屋叢書』第十一卷、名古屋市教育委員会、一九六二年、一七七頁。

28 水野の墓は法輪寺に建てられた(「水野岷山府君之墓」)。この墓誌の撰文も樋口好古である。また他に柳沢元賢による「尾張長圀爐裏御番頭格水野君墓誌」もある。また水野と同じく新川開鑿工事の責任者であった人見弥右衛門は、寛政九年(一七七九)二月一日に死去したが、「人見府君紀徳碑」が愛知郡石仏村善昌寺に享和二年(一八〇二)十一月に建立された。これまた樋口好古の撰文になる。水野の生碑の建立はこの人見の顕彰碑を承けたものだろう。

29 愛知郡沓掛村の二村山山頂に、嘉永五年(一八五二)七月に建立された「伊藤沓掛村先生之碑」がある。これも伊藤が生存中に建てられた「生碑」であった。伊藤は沓掛新田村の庄屋の家に生まれ、昌平黌で学び、村に帰った後には私塾を開いて、多くの子弟を育てた在村の教育者であった。撰文を書いたのは、幕末維新期の代表的な詩人・儒学者で、昌平黌で伊藤と同学の大槻磐溪だが、撰文の中に「所謂郷先生没而可祭於社者、将在此人、則門人等及其存而立石於沓掛山、以勒徳業、其亦古人生祠之意也歟」という一節がある。大槻によれば、伊藤は亡くなったとき社に祀るべき人物であったが、生存中のため社の代わりに門人たちは石碑を建ててそれに功績を刻んだと言っている。「生碑」は「生祠」と同じ意味をもったものであった。(河村元治編『豊明村史』豊明村役場、一九二四年、五六―五八頁、『豊明市史』本文編、豊明市、一九九三年、五八二頁、大槻磐溪「伊藤民卿碑」五弓豊太郎編『事夷文編』第四、国書刊行会、一九一一年、五八―五九頁)。

30 前掲「岷山先生治水伝」一七七―二一〇頁。

31 前掲「岷山先生治水伝」は新川開鑿の結果について、開鑿直後には枇杷島付近まで満潮の海水が上り、潮の満ち引きに応じて海辺で藻取り舟が行き来し、それを田畑の肥料に利用していたが、わずか三十年ほど経

つと、枇杷島から一里余り下まで砂河原となったため、満ち潮も上らなくなったと書いている(一八二頁)。

32 前掲「尾藩世紀」四一六頁。

33 天明四年三月には飢饉に直面した百姓・町人を救済するために、領内二十一カ所で「御救普請」が実施された。それは「札持」と呼ばれ、藩から庄屋・年寄の手を経て窮民に切手が渡され、彼らはこの切手を持って普請場へ行き、砂運び・堤普請などの仕事をおこなって、米銭を給与された。老人や子供、足の弱った男女が多くこれに参加した(「猿猴庵日記」『名古屋市史』政治編第二、六八九―六九〇頁)。

34 「尾藩世紀」天明三年十二月二十五日条には、「近侍等手普請を以て、本秋損亡の庄内川堤を修せん事を請ふ、允許あり、先是、公、彼堤の欠損を日夜歎息せらる、仍て此挙に及ふといふ」とある(四一四頁)。

35 一東利助(春日井郡押切村庄屋)「御冥加普請の記并図」(寛政四/一七九二年四月)『名古屋市史』政治編第一、名古屋市役所、一九二五年、五三八―五四三頁。

36 明和四年の大水害の直後の七月二十三日、尾張藩は水害除去の祈願を三社(熱田・国府宮・津島)に命じ、また八月十九日には「洪水溺死人弔祭」を建中寺はかに命じた(前掲「尾藩世紀」四〇四頁)。

37 「尾張名所図会」二六三頁。

38 前掲「岷山先生治水伝」二〇二頁。

39 小山田与清「松屋筆記」第一、国書刊行会、一九〇八年、一五一頁。

40 村上直「江戸幕府代官の民政に関する一考察」『徳川林政史研究所紀要』昭和45年度。

41 「尾張御行記」『名古屋叢書』続編第五卷、名古屋市教育委員会、一九六六年、四二八頁。

42 明和四年の春日井郡赤津村における水害については、「明和四年雲興寺日鑑」(『瀬戸市史』資料編四、瀬戸市、二〇〇三年、一九九―二〇九頁)を参照のこと。

43 内藤東甫「張州雜志」第十二卷、愛知県郷土資料刊行会、一九七六年、八六―八七頁。

- 44 『名古屋叢書』続編第五卷、四三〇頁。
 45 『張州雜誌』一六〇―一六一頁。
 46 同右書 一五四―一五五頁。
 47 『尾張名所図会』一五九頁。
 48 「愛知県の砂防沿革」『愛知県林業報告』第十七号、愛知県、一九二〇年。
 49 天保年間の洪水はおそらく八年（一八三七）のそれだと考えられる。
 名古屋や尾張北部では多くの家屋が倒壊する被害を出した（『愛知県災害誌』一〇二頁）。
- 50 前掲「岷山先生治水伝」二〇七―二〇八頁。
 51 前掲「岷山先生治水伝」二〇八―二一〇頁。
 52 愛知県では明治四〇年度（一九〇七年）から三十年継続の砂防整備事業費として二九六万円が提案され、県会で承認された。この多額の費用を投じた砂防工事はこの直前に実施されていた「名古屋築港以来の大事業」だと評されるものだった（『愛知県議会史』第三卷、七四七―七四八、七八六頁）。なおこの砂防工事については、愛知県編『治山21世紀へのみち―尾張地域における森林荒廃と復旧の歴史―』（二〇〇三年）を参照。
- 53 前掲「明治後期愛知県の治山対策」。
 54 「林業其他」三件ニ関スル丹羽県属ノ談話」『愛知県林業報告』第八号、一九一一年。

Abstract

Historical Culture on Management of Mountain and Water:
“Meisho-Zue” and Historical Research of Area and Environment

HAGA, Shozi

A lot of “Meisho-Zue”, a kind of gazetteer depicting and describing a specific area with comprehensive perspective, were published since the second half of the 18th century. They include detailed information of religion, people, history and nature with attached pictures. This paper aims that each gazetteer can be valuable material to understand history of environment in each area covered by the gazetteer. Two gazetteers, “Owari-Meisho-Zue” (completed in 1841) and “Choshu-Zasshi” (edited in the middle of 18th century), are analysed to survey the history of human relations with nature and environment in Owari province. Through this analysis, the paper explores how Japanese social system copes with series of natural disasters in the 19th century.